

震災にもかかわらず、京都の関西日仏学館で先日開催された研究会に参加された。神田駿河台の日仏会館に本部をおく日仏美術学会の例会もこれで66回目を数える。三つの言説と名指されたのは、マイケル・フリード、ユベール・ダミッシュそれにアビ・ヴァールブルク。

まず『没入absorptionと演劇性theatricality』という著書にみられる解読格子で十八世紀以降の絵画表象の読み替えを進めるマイケル・フリードの「美術/史学」。「没入」とは絵画内部の登場人物が画面の外の観客を意識していない様態を指し、額縁舞台よろしく鑑賞者に媚びを売る「演劇性」とは対極をなす。この大胆な仮説には、しかし「確信犯的自己没入」とでも呼ぶべき擅着がある。大阪大学院生藤原貞明氏のこの指摘にははたと膝を打った。当時の批評家たちの解読の論法を我田引水して絵画を解読するフリード。研究対象に内在する方法を自家薬籠中の方法と化すことで対



理論と現実の狭間
美術/史をめぐる三つの言説

和賀繁美
三重大学・フランス文学

象へと確信犯的に没入し、この自家中毒の閉鎖系の循環論法によって、外からの反論を予め封じ込める。このフリード一流の作戦は優れて「演劇的」な振る舞いではないか。

対するに『遠近法の起源』のダミッシュの策略は対象と方法との乖離ないし裂け目fissureにあり、とするのが東京大学院生松岡新一郎氏の見解だ。フィレンツェのサン・ジョヴァンニ洗礼堂を描いて透視図法の起源のひとつをなすブルネレスキの謎の装置は、復元してみると奇妙なまでにジャック・ラカンの視覚図式(赤間啓之)に似ている。だが無数の推測の起源となったこの図は、まさに始源の神話よろしく不在なのだ。精神分析とのこの暗合に偶然を越えた必然を捏造する論者の論法に軋みが走る。

同毒療法homeopathyか逆症療法allopathyか。自己言及の鏡像の狭間に捕われた美術/史学はヴァールブルクの越境の狂気を追体験すること(加藤哲弘氏)から再生せねばなるまい。